

夏目漱石『虞美人草』に出てくるイタリアの詩人レオパルディ Giacomo Leopardi に興味を持って以降、「レオパルディ」の名を聞くと、心が反応する。

そんな折、イタリア文化会館でレオパルディの講演会があると知り、飛びついた。その講演の中で、三島由紀夫『春の雪』豊饒の海（第一巻）に、レオパルディが出てくることを知り、その本を読んでみようと思った。

実際は、お化けと呼ばれる青年がレオパルディの本を読んでいるというシーンだけだったが、『春の雪』のストーリーには、かなり引き込まれた。そこで第二巻『奔馬』第三巻『暁の寺』第四巻『天人五衰』と続けて読む気になった。

豊饒の海第一巻『春の雪』は、夢日記をつける松枝清頭という 18 歳の青年が 20 歳で亡くなるまでの話である。読み始め当初はこの青年がシリーズの主人公かと思ったが、清頭の友人である本多繁邦の成年から老年までの人生を軸に描かれたシリーズであった。各巻の中で本多と出会う一人の若者の人生が描かれていく。第二巻『奔馬』で本多に関わりを持つのは、第一巻で松枝清頭の世話係の書生であった飯沼茂之の息子「飯沼勲」だった。（清頭も勲も一人っ子の跡継ぎだった）

その『奔馬』を読んでいた時のことである。私の頭の中で困った現象が起こった。半ばまで読んだあたりだろうか。「飯沼勲」の「勲」を私の頭は、全く自然に「トオル」と読んでしまうのである。この文字は「イサオ」とであると、何度意識に働きかけても「トオル」と読み下してしまう。そこで、私はこの文字が出てくるたびに、意識して立ち止まらなければならなかった。

それから第三巻を読み終わり、第四巻の頁を開いた時である。最終巻『天人五衰』に出てくる 16 歳の少年の名は「安永透」—「トオル」だった。そこで私は不思議な、というより微妙にうすぼんやりとした心持がした。

この「豊饒の海」シリーズは転生の物語である。侯爵家子息の松枝清頭には左の脇腹に 3 つの黒子があった。その清頭は「滝の下でまた会うぜ」と友人の本多に告げた数日後、20 歳で亡くなった。そして本多は、神風連に傾倒する 19 歳の飯沼勲に出逢い、滝に打たれる勲の身体に同じ黒子を認めた。その勲が 20 歳で割腹して亡くなると、第三巻で自分は日本人だと言って狂気扱いされながら、清頭と勲の人生に起こった事件の日をすらすらと答えるタイの月光姫（ジン・ジャン）に出逢い、その身体に同じ黒子を見つける。しかし彼女もまた 20 歳で急死する。それから本多は、船の入出港情報を管理する信号所勤務の安永透の脇腹に同じ 3 つの黒子を発見し、養子に迎える。すべては清頭の「夢日記」の中に記されたことと符合した転生の物語である。それにしても、私の頭の中で「勲」は、まだ死の影も見えない時点で、「透」に転生してしまったのだろうか。

清頭と透は柔らかな印象の目の持ち主で、勲とジン・ジャンは、強い印象の目の持ち主だった。その正反対の目で彼らが見たものは何か。睡眠中の来世の夢、覚醒中の未来の夢、過去に呼び戻される夢。一度も夢を見たことのない透だけが 20 歳で服毒自殺を図るも、視力を失って現世に残された。透は、鏡に映る本多のもう一人の自分だった。本多は月修寺で透の今住む世界に触れる。記憶の中の既視感とは何か…。

語彙、表現に「これが文学だ」と感じながら読んだ作品だった。 (2018.9.15)